



Vol.123
2025.11



晩秋のメッセンジャー

amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori

* 網張の森の生き物たち *

amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori

白い睫毛の “クシヒゲシャチホコ”

ここ数年の中では紅葉の色づきがよく、赤・橙・黄色のグラデーションを堪能できたのも束の間、雪が積もる日もあり秋と冬を行き来しているようなある日、森の中でクシヒゲシャチホコに出会いました。“ガサゴソ”と落ち葉歩きを堪能していると幹に止まっている枯れ葉色のガを発見。背面から見ると少し透けた翅がハの字に広がり体が少し見えていましたが、近づくとも“スッ”と両翅を内側に引き寄せてシャチホコらしいスマートな佇まいに。覗き込むと黒くて愛らしい目は、頭部から翅の付け根にびっしり生えた毛の中に埋もれているようでした。オスは幅の広い羽毛状の触角をしていますが、このガは細く糸状でメスのようです。晩秋の頃から初冬にかけて、地面から膝丈程の高さをヒラヒラと飛んでいるフユシャクの仲間と同じ頃に姿を現しますが、フユシャクの仲間と比べると頭部付近の毛にボリュームがあり、豪華なファーを付けているようです。翅を閉じた後は、気配を消しているかのようにじっとしていましたが、オスを引き寄せるフェロモンは漂わせていたのかも…。いつ雪が降るとも知れないこの時期の出現は、天候よりも天敵の少なさを優先させたのでしょうか。その小さな体には、生き抜く術が詰まっているように感じられました。

**What is
“Kushihigeschachihoko”?**
『オスが羽毛状の触角を持つ
シャチホコガ』

シャチホコガ科
開張：約 33mm
分布：北海道～九州

オスの触角は大きく羽毛状で、メスは糸状。11～12月に発生し山地では普通に見られる。幼虫の食草はイタヤカエデやハウチワカエデの他にカバノキ科のクマシデやサワシバなど。卵で越冬する。

(参考図書：「標準原色図鑑全集 1 蝶・蛾」)

amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori amiharinomorinoikimonotachi amiharinomori amiharinomori

光 と 色 の
い ろ い ろ
- Point of view -

📷 No. 10

分布域の拡大、個体数を増やす動物たち

近年、岩手県全域でニホンジカが増加傾向にあります。温暖化に伴う積雪の減少、道路に撒く融雪剤の利用（ナトリウム補給）等、越冬し生息数を増やしている要因は複数考えられます。ニホンジカは、草木の枝葉や種子、時には樹皮や落ち葉まで採食します。こうした旺盛な食欲によって、農林業や森林生態系等に幅広い影響を与える事が懸念されます。



ニホンジカ
20231210 撮影

季節のはざまに現れた、思いがけない訪問者



イノシシ
20241129 撮影

昨年の初冬、網張の森に4頭ほどのイノシシの群れがやってきました。雪が数10センチ積もる中を歩き回る様子が撮影された他、食物を探し地面を掘り返したような生々しい痕跡も確認されています。その後、寒さや積雪に耐えかねたのか、イノシシの姿を見かけることはありませんでした。

網張でイノシシの群れが確認されたのは、これが初めてになります。小さな個体が雪をかきわけ歩む姿はほほえましいですが、県内全域にイノシシの分布が拡大している事情を踏まえると、先行きが案じられます。



ニホンカモシカ
20241119 撮影



参考資料：岩手生態学ネットワーク 岩手発・市民講座「人と自然の生態学」第22回『変わりゆく北東北の環境と生き物たち』



アミハリ・バース
Vol. 6 6

今秋、マミチャジナイやツグミが飛来した10月中旬、シロハラ姿も確認されました。冬鳥たちは温泉館前にあるナナカマドの実をついばみ完食すると、より暖かな場所を目指して旅立ったようです。

シロハラは雌雄で大きな色の違いはありませんが、雄は頭部がやや黒っぽく、腹から脇にかけて灰色味がかって見えるのが特徴です。一方、雌は喉元に灰褐色の斑が入り、腹部が雄より白く見えます（イラストは雄です）。名前ほどお腹は白くありませんが、夏鳥の「アカハラ」と対にして捉えると覚えやすいですね。

シロハラ

科名：ツグミ科（ヒタキ科）
全長：約24cm
生態：冬鳥
分布：本州西南部、
四国、九州





撮影日：2013年12月18日

ベスト写真で綴る！

「岩手山カレンダー」撮影エピソード（4）

－中山大太郎さん22年の軌跡－

12月「石仏の樹氷」（お鉢にて）

撮影日：2018年12月2日



この写真は、ビジターセンターに展示されている「岩手山山頂360度パノラマ写真」を撮影した日のものです。吉田修次さんより岩手山山頂からの360度の撮影を頼まれていたので、秋から冬にかけての天候の安定した日を選んで何度も登っていました。この日は朝8時前に馬返しをスタート。偶然、山仲間6～7人に出会い、最深で腰までの積雪をラッセルした後から登り、12時過ぎに8合目の小屋に到着しアイゼンを装着しました。Y字分岐から右側を登り、一升目のお鉢からこの「石仏の樹氷」を撮影しました。天気が良くて八甲田山が見えていても鳥海山が霞んでいたり、360度の展望はなかなか無く、今年初めて出会うことができました。14時頃の頂上は風が強く体感温度はマイナス10度以下。手持ちのカメラなので高さがズレないように、また1/3ほど重なるように360度の撮影を行いましたが高さが少しズレてしまいました。この日、自分一人では2合目くらいまでしか行けなかったと思います。山仲間の協力があってこそ撮影できました。感謝。

タイトル左の写真（2023年12月18日撮影）は構想から10数年、ようやく全ての条件が揃い撮影できたものです。

条件は①山に雪があり満月である、②日の出の10数分前に月が沈む、③月没の方位が290度以上である、④正中高度70度以上である、⑤山との距離が20km以上で撮影場所がある、⑥天候が良好であることです。全ての条件が揃うのは十数年から数十年に一度のことです。一見すると月明かりのように見えますが、実際は夜明け前の山が赤く染まる直前の瞬間を捉えたものです。当時は気象庁のHPで日や月の出入りの時刻や水平角、正中角などの条件が確認でき、何年もチェックしてきました、この日しかないと判断し撮影に出かけました。大抵の人は日の出日の入りの時刻が1日1分ほど変わることは知っていますが、月が今日と明日で何分違うかを知っている人は少ないと思います。月は時間も角度も1日で大きく変化し、それに伴い撮影場所も数百mから数kmと変わるため、地図上で撮影場所を検討します。この写真が撮れた時は本当に「やった！」という気持ちでした。これ以上の月は撮れないと感じたので、これで月の写真は卒業です。非常に思い入れのある1枚です。

1月「朝日に染まる」（雫石町 鎌倉森山頂にて）

撮影日：2023年1月19日

午前4時15分、網張ビジターセンターから積雪期しか登れない鎌倉森（1,317m）へ、ヘッドライトの明かりを頼りにスタートしました。この日の新雪は約15cm。一人でのラッセルも大変ではありません。大ブナ平から先は全く踏み跡がありませんでした。右側の雪庇が危ないという意識があり、真っ直ぐ登っているつもりでも、ヘッドライトの明かりは照らす範囲が狭く、下山時に自分のつけた跡を見てかなり左側を登っていたことに気がきました。登頂は午前6時15分。日の出の撮影まで40分以上あります。気温はマイナス17度。とても寒いので、写真に写る場所には足跡を付けないように手前で足踏みをしながらかけていた記憶があります。この日は条件が良かったので期待して日の出を待ちました。早池峰山の左から日が昇り雪面が赤く染まります。中央に見えるのは岩手山です。新しい年の始まりの1月のカレンダーは、日の出の写真にしたいと思い毎年撮影しています。この年も皆さんが良い年を迎えますようにという思いを込めて撮影しました。



岩手山登頂200回を超えた頃から、登山の記録をつけています。歩きながらメモ紙に記録し、帰宅後に黒色はコースタイム、青色は高山植物、赤色はその他気に留めたことなどを色分けして手帳に記します。植物で分からないものは図鑑で調べたり尋ねたりして確認します。記録をつけることにより、いつ、どこで、どの花が咲いていたのか、何種類見られたのかなどを容易に振り返ることができます。また、次の計画を立てやすくなり、誰かを連れて行く際の参考にもなります。赤で記したことを読み返すと、その日の登山が様々思い出されます。このインタビューも手帳を見て振り返りながら話をしています。

